

高等学校「古文」授業における文化史的観点導入の試み(3)

—『平家物語』諸本における巴の人物像を通じて—

源 健一郎

高等学校における新カリキュラム科目「古典A」における授業実践案を提示する。古典文学研究の現在の問題意識を、高等学校における古典学習に活かす試みでもある。今回も文化史的観点を導入しながら、巴という特異な女性像の考察を通じて『平家物語』の読みを深めることを目的とする構成である。教材として現代の随筆・評論文を用いることで、生徒たち自身が主体的に考え、古典学習に興味を持って取り組めるような内容となるよう心がけた。1・2節において、学習指導要領との関連、及び古典文学研究との関連について述べた後、3～6節において、導入・展開・総括に区分した授業案について概説する。

キーワード：古典文学、国語教育、人物伝承、平家物語

はじめに

高等学校「古文」授業において、ややもすると教授者は、文法や語義の解説等に偏重したテクニカルな授業に陥りがちである。そうした知識の教授を授業の中心に据えておけば、授業時間中の生徒との遣り取りは、ほぼ事前の想定範囲内に収まることが多く、教材を読み進める上で、授業の時間配分の計画も立てやすい。

しかしながら、それでは、大学受験対策に特化した講義や問題演習を繰り返す学習塾や予備校における取り組みと、高等学校「国語」教育との間に、それほど差異がないことになってしまう。そもそも、それでは「国語」の授業というべきでさえないのかもしれない。

とはいえ、前近代の言語表現が、伝統芸能や大道芸などを通じて、庶民に広く享受されたような時代は、すでにはるか遠い時期のこととなってしまった。21世紀の初め、齋藤孝『声に出して読みたい日本語』¹⁾に代表される“音読ブーム”が話題となり、戦前に当たり前のように生徒たちに課されていた古典文の暗唱が見直される機運も生まれたが、それも持続的な取り組みとして、学校教育にひろく展開したとは言いがたい。高等学校の生徒たちの「古文」に対する苦手意識や忌避意識も、年々高まっているのではないだろうか。

こうした状況下、先般、学習指導要領「国語」における「古典A」において、古典文(原文)のみならず、古典を題材とした近代以降の文章を教材として扱うことを積極的に提起したことは意義深いものと考え。「古文」に対する苦手意識を持つ生徒たちに、古典世界のおもしろさ、興味深さを実感してもらうために、有効な手段であると思われるからである。

本授業案においては、『平家物語』のなかでもひととき特異な女性像である、女武者、巴を

取り上げてみたい。古典世界において典型化された平板な女性像とは対極にある点、生徒たちの関心を惹く可能性は大きいと考えられる。教材としては、1979年（昭和54年）、第1次オイルショックと第2次オイルショックの狭間に出版された永井路子による随筆と、2005年（平成17年）、バブル経済崩壊後の景気が持ち直してきた時期に発表された拙稿を元にした評論文とを用いてみたい。1925年（大正14年）生まれの永井路子は、歴史小説・歴史エッセイに定評のある作家であり、稿者は昭和生まれの日本文学研究者である。両教材とも、巴の人物像に関するものだが、前者は、『平家物語』諸本のうち、主に語り本系（覚一本）を、後者は『平家』諸本において最も成立の下る一本、源平盛衰記を扱う、という違いがある。むしろ、一義的には、諸本（バージョン）の違いによって、ある女性の人物像にどのような違いが生じてくるのか、その歴史的・文化史的背景は何か、ということの問題にすべきである。

しかしながら、一方で、「古文」の標準的な学習領域から逸脱する面はあるものの、戦前生まれの女性作家が論じる巴と、戦後生まれの男性研究者が論じる巴との違い、すなわち、古典文学作品に対する読み取りが、世代によって、性差によって、あるいは、作品に向かい合うスタンスや執筆時の時代状況の違いによって、どのような差異を生じるか、という観点において読み比べ、生徒たちに考えさせることがあってもよいものとする。

1 学習指導要領との関連

本授業案が授業実践を想定しているのは、「古典A」である。高等学校学習指導要領²⁾には、「古典A」の目標として「古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。」（第2章第1節「国語」第2款第5「古典A」1「目標」）と掲げられる。本稿の試みは、このうち、特に下線部の内容に呼応する授業案となる。

本授業案のポイントは、以下に挙げた①・②の2点である。それぞれが学習指導要領、および同解説³⁾とどのような関連をもつのかについて示しておきたい。関連の深い内容には下線を付しておいた。

- ①文法や語義の習熟に偏りがちな古文授業ではなく、古典作品を題材とした現代の評論文を読解することで、生徒たちの古典世界に対する興味関心を喚起する。

【学習指導要領】

第2章第1節「国語」第2款第5「古典A」2「内容」

(1) 次の事項について指導する。

- エ 伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、我が国の伝統と文化について理解を深めること。

第2章第1節「国語」第2款第5「古典A」3「内容の取扱い」

(2) 古典を読む楽しさを味わったり、伝統的な言語文化に触れることの意義を理解したりす

ることを重視し、古典などへの関心を高めるようにする。

(3) 教材については、次の事項に留意するものとする。

イ 教材には、古典に関連する近代以降の文章を含めること。また、必要に応じて日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること。

ウ 教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。

(ア)古典を進んで学習する意欲や態度を養うのに役立つこと。

【学習指導要領解説】

国語編第2章第5節「古典A」1「性格」

小学校、中学校及び「国語総合」の指導との一貫性を図りながら、伝統的な言語文化に関する課題を設定して探究したり、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について生徒に考えさせたりして、伝統的な言語文化を継承し、現代に生かすために、古典への興味・関心を広げることを重視している。

国語編第2章第5節「古典A」2「目標」

古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

(中略)「古典に関連する文章」とは、これまでの「古典講読」において、教材として例示していた古典の現代語訳に加え、古典について解説した近代以降の文章や、古典を素材にしたり翻案したりした近代以降の文章などを指し、教材の幅を広げることを示している。これは、今回の改訂において小学校、中学校及び「国語総合」と一貫して重視している、古典に親しむための指導を一層推進するためである。(中略)なお、古典を読むためには古典についての知識及び技能を確実に身に付けていくことが望まれるところであるが、訓詁註釈に偏った古典の授業が古典の学習に意義を見いだせない生徒を生まないように、古典を読む意欲をまず高めることが何よりも大切である。

国語編第2章第5節「古典A」3「内容」

(2) 言語活動例

ウ 読み比べたことについて、文章にまとめたり話し合ったりする言語活動

「古典などを読み比べ」とは、同時代の文章、同一のテーマや素材の文章、また、古典とそれを翻案した近代以降の文章などを読み比べることである。

国語編第2章第5節「古典A」4「内容の取扱い」

(2) 「古典A」の指導に当たって全般的に配慮すべき事項

「古典を読む楽しさを味わ」うことは、生涯学習を視野に入れて学習する「古典A」において、特に留意すべき事項である。語句や文法、現代語訳の学習のために過度に時間を取られることで、豊かな古典の世界に触れる前に、生徒を古典嫌いにしてしまうこと

のないよう、教材や指導の方法を工夫し、古典の世界に楽しく触れることができる授業を展開し、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成していく必要がある。

(3) 教材に関する事項

古典の原文のみならず、古典に関連する近代以降の文章も含めて、まとまりのあるものを中心として取り上げ、古典に親しむ態度を育成することになる。

- イ 「古典に関連する近代以降の文章」は、目標にある「古典に関連する文章」を受けて時代的な範囲を示している。近代以降の文章にも、古典の翻案などのほか、古典の魅力や現代的な意義などを平易な言葉で記した解説は多い。適切な分量でこれらを扱うことで、古典への興味・関心を広げることができることから、「国語総合」と同様に、教材として必ず含めることとしている。

- ②巴という女性像に関して、『平家物語』と、その一異本である源平盛衰記、それぞれにおける描かれ方を理解することによって、古典の時代における女性の社会的な立場について、生徒たちに考えさせる。

【学習指導要領】

第2章第1節「国語」第2款第5「古典A」2「内容」

(1) 次の事項について指導する。

ア 古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。

(2) (1) に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ウ 図書館を利用して古典などを読み比べ、そこに描かれた人物、情景、心情などについて、感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりすること。

第2章第1節「国語」第2款第5「古典A」3「内容の取扱い」

(2) 古典を読む楽しさを味わったり、伝統的な言語文化に触れることの意義を理解したりすることを重視し、古典などへの関心を高めるようにする。

(3) 教材については、次の事項に留意するものとする。

ウ 教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。

(イ)人間、社会、自然などに対する様々な時代の人々のものの見方、感じ方、考え方について理解を深めるのに役立つこと。

(ウ)様々な時代の人々の生き方や自分の生き方について考えたり、我が国の伝統と文化について理解を深めたりするのに役立つこと。

【学習指導要領解説】

国語編第2章第5節「古典A」2「目標」

「我が国の伝統と文化に対する理解を深め」とは、古典などを読むことを通して、我が国の伝統と文化の特質などについての理解を深めることである。(中略)急速に国際化の進

む社会で生きていくに当たって、諸外国の伝統と文化を理解しそれを尊重するためにも、我が国の伝統と文化について自覚し、我が国と郷土を愛し、それを尊重する態度を育成することが大切となる。

（中略）「生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」は、長年にわたって伝えられてきた古典を読むことを通して、人間、社会、自然などに対する様々な考え方や感じ方を知り、人生を豊かにしていくことのできる人間を育成することを示している。具体的には、日常生活において古典や古典に関連する文章を読むことを通して、古典の中の人間の生活や人生を知り、自らの生き方を見つめ直すとともに進むべき方向を模索しようとする態度、また、古典などの表現から自らの思考や感情を表現する様々な方法を見いだし、表現に生かそうとする態度などを育成することになる。

国語編第2章第5節「古典A」3「内容」

(1) 指導事項

ア 思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察することに関する指導事項

「古典など」とは、古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を指す。「思想や感情を読み取る」とは、書き手や文章中の人物のものの見方、感じ方、考え方をとらえることである。

古典には、それが成立した時代に生きた人々の思想や感情が込められている。また、古典に関連する文章には、古典の価値や面白さなど、書き手の古典に対する思いが表れている。生徒は、それらに触れることによって、昔から変わらない日本的なものの見方、感じ方、考え方を知り、我が国の文化の特質を理解することができる。また、現代では忘れられがちな古人の思想や感情を理解することを通して、現代人のものの見方、感じ方、考え方を見つめ直すこともできる。

「人間、社会、自然などについて考察する」は、上記のことを前提に、生徒が自らの生活などに照らして、人間、社会、自然などについて考察することを示している。このことは、古人の心などに触れ、古典を読むことの意義を理解する上で極めて重要である。

古典などに表れている、様々な思想や感情には現代に通じるものもあれば、異質なものもある。これらに触れることを通して、ものの見方が広くなり、考え方が深まり、豊かな感性や情緒がはぐくまれる。古典を読むことを通して、自らの生活や人生に目を向け、その在り方を深く考える態度を育成することが大切である。

(2) 言語活動例

ウ 読み比べたことについて、文章にまとめたり話し合ったりする言語活動

「そこに描かれた人物、情景、心情など」は、読み比べる際にとらえるべき事柄を例示している。文章中の人物の様子や生き方、文章の舞台となる情景、人物の心情を的確に把握することは、文章を読む際の基本である。

「感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりする」とは、単に文章を読み比べるだけで終わるのではなく、文章を読んで、生活や人生などについて感じたり考えたりしたことを、文章にまとめたり話し合ったりすることである。古典に触れる中で、生徒も一人の読み手として、自身の知識や価値観に照らして感じたり考えたりする。古典に触れて生じる、こうした生徒の内面の変化を積極的に表現させることによって、古典との対話を促し、生徒同士の交流を深め、古典の学習を生徒にとって価値あるものにしていくことができる。

国語編第2章第5節「古典A」4「内容の取扱い」

(2)「古典A」の指導に当たって全般的に配慮すべき事項

「伝統的な言語文化に触れることの意義を理解」することは、我が国の伝統と文化に対する理解を深めることをねらいとして置かれた「古典A」において重視すべき事項である。そのためには、身近にある事柄を通して古典の現代的な価値を生徒に示し、古典が文化の土台にあることを実感させることが大切である。古典を学ぶということは、そこに表れている古人のものの見方、感じ方、考え方を知ることであり、同時に自らの思考や感情を表現する様々な方法を身に付けていくことでもある。

このような学習を重視することで、生徒は自分の生き方を見つめるとともに進むべき方向を模索し、自らのアイデンティティーを確立していく。古典とは、急速に変化を続ける現代にあって、現在の自分について確認するものであることに気付く。このように、「古典A」では、古典を学ぶ意義を認識させ、「古典などへの関心を高める」ことを重視している。

2 日本古典文学研究の動向との関連

『平家物語』研究における巴の人物論として、一つの劃期をなしたのは、水原一による説話形成論であろう。巴の人物形象の背後に、巴を名のる瞽女（女芸能者）による語りを想定するものである⁴⁾。一方で、テキスト論的アプローチを端緒として、徹底的に作品本文に向き合って分析を行う高木信は、語り本（覚一本）の本文が、作者（編者）の思惑を越えた巴の意志的行動を実現させていると指摘している⁵⁾。歴史学の分野でも、細川涼一が、民衆史的観点から巴を取り上げ、詳細な考察を展開している⁶⁾。

これらの成果を踏まえつつ、源平盛衰記では、覚一本的な巴像とは対極的な姿が強調されていることを、中世武家の家督継承意識なども勘案しつつ論じたのが、教材文Ⅱの元となった拙稿である⁷⁾。なお、稿者は、中世末～近世初期にかけての文学・芸能を対象に、源平盛衰記を起点として変容を続けた巴像についても別に考察した⁸⁾。高木信は、これら二つの拙稿を踏まえ、先の論文を増補改訂して著書に収めている⁹⁾。また、須藤敬も、高木・源論等を批判的に継承・展開させつつ、語義に忠実で、かつ作品横断的な文化史的論述を提示している¹⁰⁾。

注目すべきは、直接、巴を対象にするものではないものの、高木は著書『「死の美学化」に抗する—『平家物語』の語り方』において、須藤は「〈戦い〉の描写における伝統的な言語文

化」他において、国語教育における『平家物語』教材の可能性と限界について、積極的に発言を続けていることである¹¹⁾。本授業案は、両氏の関係諸論に比して極めて拙いものに過ぎないが、古典文学の人物論的研究の成果を、高等学校の教室、国語教育の上に還元しようと試みる両氏の姿勢に、稿者も共感を覚える面が大きいのである。

3 導入—平安王朝世界における女性像、および『平家物語』についての概説

高等学校「古文」教科書によく取り上げられる作品における女性像について、あらかじめ解説しておきたい。『源氏物語』の桐壺更衣や紫上、女三の宮に纏わる本文や、『蜻蛉日記』「ゆするつき」等、平安王朝物語や女流日記など、平安王朝世界における女性の立場や心情が読み取られる教材を例に挙げるのがよいだろう。当時の婚姻・恋愛関係において、女性が主体的・自立的に行動したり、判断したりすることが困難であったこと、ときに社会的立場の弱さに翻弄される女性もいたことなど、現代における婚姻・恋愛事情や、女性の社会的立場等に関する話題にも触れながら、生徒たちの興味関心を喚起しつつ、古典の時代と今とを対比的に把握できるように、問題意識を持たせておきたい。

すでに授業で扱った教材に該当するものがあれば、より適切であるが、以後に取り上げる予定のある教材について、それらの内容を掻い摘まんで紹介しておいてもよいであろう。

その上で、今回の授業案で取り上げる教材、『平家物語』の文学史的位置づけや内容について、概説する必要がある。具体的には、以下の3点となる。

- ①京の都における平安王朝から、鎌倉における武家政権へ、という政治権力の大きな転換をもたらした動乱を描く文学作品であること。それゆえ、やはり基本的には、男性中心的な視点において物語が構想されていること。この点については、二つの教材文を読み比べる中で、さらに問題になってこよう。
- ②祇王や小督に代表される悲恋のエピソード、小宰相や重衡北の方に代表される戦乱による夫との死別のエピソード、灌頂巻における建礼門院徳子の出家遁世譚など、『平家物語』における代表的な女性像について、紹介すること。それらに対して、本授業案で取り上げる女武者、巴の存在は極めて特殊なものとなる。
- ③『平家物語』が琵琶法師によって語られたことは有名であるが、そうした語りの台本としての『平家物語』以外にも、書物としてまとめられ、語りの台本よりも、より大部な物語としてのバージョン（諸本）も存在していること。一般によく読まれ、教科書にも取り上げられるのは、覚一本と称される語りの台本であるが、本授業案では、書物としてまとめられた一諸本、源平盛衰記を取り上げることになる。

以上のような導入に加え、今回の取り組みでは、古典文そのものを読解することよりも、古典文の内容を解説した2種類の文章を読み比べ、古典の時代における女性像のあり方について考えることの方が、より大きな授業の目的となることを、生徒たちに周知しておくべきである。

4 展開（1）—教材文Ⅰ（永井路子「巴」）の読解

永井路子「巴」は、先述の通り、語り本系本文（覚一本）を前提とした歴史エッセイである。

巴¹²⁾

永井路子

源義仲の上洛に従って木曾谷からやって来た巴は、『平家』の中では、極めて特色のある女性である。もっとも、物語の中で彼女の登場する部分のごく少ないが、それでも、短い文章の中に彼女の個性はくっきり現れている。

第一に彼女は、その生い立ちがしめすように、田舎の女だ。木曾谷に育ち、もし、こうした歴史の大変動がなかったら、絶対に都など見る事はなかった人間である。しかも彼女は田舎の育ちにふさわしく、骨太で体格がいい。『平家』には都の女性以外はほとんど登場しないし、かりに登場したとしても、重衡の最後の愛人となった千手のように、およそ東国の女性らしくない、都会人と変わらない存在として描かれているのに、巴だけは、全く別のタイプとして取り扱われている。

しかも、彼女は、骨太なたくましい女性にふさわしく、荒馬をのりこなし、男まさりの働きをする女武者だ。『平家』の中の女性は、みな、なよなよとしているのに、これも全く異質である。

木曾殿は信濃より、ともゑ・山吹とて、二人の便女を具せられたり。山吹はいたはりあって、都にとどまりぬ。中にもともゑはいろしろく髪ながく、容顔まことにすぐれたり。ありがたきつよ弓、せい兵、馬のうへ、かちだち、うち物もつては鬼にも神にもあはふどいふ一人当千の兵也。究竟のあら馬のり、悪所おとし、いくさといへば、さねよき鎧させ、おほ太刀・つよ弓もたせて、まづ一方の大將にはむけられけり。度々の高名、肩をならぶものなし。

(木曾義仲は、信濃から、巴、山吹という二人の美女をつれて来ていた。山吹は病気で都にとどまった。中にも巴は色白く、髪は長く、大変美貌だった。しかも稀に見る強弓をひく剛の者で、馬に乗っても、徒歩立ちでも、刀剣をもてば、鬼でも神でも相手にしようという一人当千の女武者だった。屈強の荒馬乗りで、難所をうまく乗りこなす名手だったから、戦さといえ、色どりのいい鎧を着せ、大太刀や強弓をもたせて、まず一方の大將にして敵陣へさしむけられた。そこで度々たてた手柄は、並ぶものがないくらいだった。)

女といえば、おしとやかにしているものと相場のきまっていたそのころとしては、全く型破りの女だ。『平家』が一人当千の「兵」と男並みにいっているのが、まことにおもしろい。

彼女は一説によると木曾の豪族、今井兼平の娘ということになっている。が、兼平は義仲の乳母の子—いわば乳兄弟だから、その娘では義仲の愛人としては年が違いすぎる。むしろ兼平の妹と見た方がいいのではないかとすれば、兼平の父、中原兼遠の娘ということになるが、じつをいうと彼女は、北条政子や建礼門院のように実在性のたしかめられる存在ではない。いたとも言えるし、いないとも言える—といった感じで、まして、彼女が人なみすぐれた女武者

だったかどうかは、『平家』とか『源平盛衰記』のような物語にしか伝えられていない事なのだ。

が、ここで必要なのは、そうした実在性のせんさくより、『平家』が義仲にまつわる人物として、どうしてこういう異色の人物をとりあげたかということであろう。『平家』に登場する鎌倉方の勇猛な武者はたくさんいるし、それぞれ个性的で、平家側とは違った活躍ぶりをみせるが、この中になぜか女武者はいない。

*破竹の勢いで平家の軍勢を倒し、都落ちした平家に代わって都の実権を握った義仲であったが、田舎育ちゆえ、天皇家や貴族たちを向こうに回して政治をつかさどることは難しく、『平家』ではその姿が戯画化されてもいる。一方で、天皇家の実力者、後白河法皇は、密かに鎌倉にいた義仲のいところで、源氏嫡流の頼朝と通じて、義仲打倒の兵を挙げさせる。

そのうちに遂に鎌倉勢が姿を現した。その勢六万余騎（もちろんこれには誇張もあるが）と称する彼等に立ちむかう義仲は、たった千六百騎程度だったと『平家』は伝えている。これでは勝敗は戦う前からもうきまってしまったようなものだ。しかも最後には義仲は主従たった七騎になってしまっていた。そしてそのときから巴のめざましい働きがはじまる。さきにあげた『平家』の原文は、まさにその部分であって、巴はその勇猛さの故に、乱戦の中を生きぬき、七騎の中の一人として、義仲に寄りそうようにして馬を走らせていた。

このとき、巴の兄の今井兼平は別動隊として、八百騎をつれて勢田の源氏勢を迎え討つべく出撃していた。義仲は最後の日に、もっとも信頼していた乳兄弟の兼平を手放してしまったことを後悔し、都から勢田へと戦いながら彼を探しにゆく。一方兼平も義仲の身の上を案じながら引き返して来て、大津の打出の浜のあたりでめぐりあう。ここで残党を呼び集めると約三百騎ほどになった。

「おお、これだけあれば、最後に一勝負できるぞ」

義仲は勇み立ち、鎌倉勢の一条次郎忠頼、土肥次郎実平などの軍勢とわたりあい、中央突破をこころみるが、敵陣をかけぬけるうちに、残りは五十騎となり、十数騎となり、遂には五騎になってしまった。

その五騎の中に、まだ巴は残っていた。それを見たとき、義仲は言った。

木曾殿「おのれはとうとう、をんななれば、いづちへもゆけ。我は打死せんと思ふなり。もし人手にかからば自害をせんずれば、木曾殿の最後のいくさに、女をぐせられたりけりなんどいはれん事もしかるべからず」との給ひけれ共、猶おちもゆかざりけるが、あまりにいはれ奉りて、「あつぱれ、よからうかたきがな。最後のいくさしてみせ奉らん」とて、ひかへたるところに、武蔵国に、聞えたる大ぢから、をん田の八郎師重、卅騎ばかりで出きたり。ともゑそのなかへかけ入、をん田の八郎におしならべ、むずととってひきおとし、わがのつたる鞍のまへわにをしつけて、ちっともはたらかさず、頸ねぢきつてすててんげり。其後物具ぬぎすて、東国の方へ落ぞゆく。

（義仲が「巴よ、お前は、女だから、どこへでもいい、早く落ちてゆけ。自分は今日ここ

で討死する。もし人手にかかるようなことがあったら自害するつもりだから、木曾殿は最後まで女を連れていたなどと言われるのもしゃくだから」といったが、巴はなかなか離れてゆこうとはしなかった。が、あまり義仲にそう言われるので「ああ、相手にするにいい敵がないものか。私の最後の働きをお目にかけようものを」と言って、馬を立てて待ちうけていると、そこへ、武蔵国でも大力のきこえ高い御田八郎が三十騎ばかりひきいて出て来た。巴はこれを見ると、その軍勢の中に駆け入り、御田八郎にぴったりと馬を並べ、むんずと組んで馬からひきおとし、自分の馬の鞍の前輪の部分にぐいと押しつけ、ちっとも相手を自由にさせず、首をねじきって捨ててしまった。そうしておいて彼女は鎧をぬぎすてて、東国の方へおちて行った。)

巴の男まさりの活躍ぶりが描かれているのは、この部分だけである。簡潔な描写だが、彼女の颯爽たる働きぶりが目にうかぶようだ。彼女が本気になれば、力じまんの大の男もどうすることもできない。鞍の前輪におしつけられたまま、首をねじきられてしまう。

大の男を向こうにまわしてこうした働きをする女丈夫の巴だが、おもしろいことに『平家』は彼女については、色白の美女だ、と書いている。平安朝的な感覚からすれば、こんな女は沙汰の限りで、野蛮な女だとか、大女で醜いと書かれてもしかたのないところなのに、『平家』はそう書いていない。このあたりが『平家』独自の感覚である。

たしかに『平家』の中の女性は、王朝的、『源氏物語』的な基準で描かれている場合が多いのだが、それでは律しきれない時代になって来ているのだ。女性描写ばかりでなく、『平家』は王朝風な美意識にひきずられながらも別の世界を生み出している。巴の場合などは、まさにそのあらわれであろう。

さらにもう一つ、『平家』はほろびゆくものに対しては、いつもかぎりない愛情の眼をむけている。あれほど戯画化して描いた義仲に対しても、その死について語るときは、ひどく哀切な思いがこめられているのでもわかる通りである。

乳兄弟の兼平を求めて走り寄った彼が、
「六条河原の戦いで死んでもいいと思ったのだが、お前に逢いたさの一心でここまで来たのだぞ」

と言ひ、最後の力をふりしぼって戦うあたり、また、最後に兼平とたった二騎になって、

日來はなにもおほえぬ鎧が、けふはおもうなつたるぞや

と泣くあたり、『平家』の中での最も感動的な部分である。この敗将義仲の悲劇的な最後に従った女武者巴にも、筆者があわれみの眼をむけたのも当然のことかもしれない。

とはいうものの、都人である『平家』の筆者にとっては、木曾は、やはり異常な暴力集団だった。彼らが都入りして滅びるまでの間は、都人にとっては、未開野蛮人に征服されたような、まことに息苦しい、勝手の違った感じの半年間であつたろう。こうした地方人が都を制圧することがあるという現実を目のあたりに体験しながらも、彼らに対する違和感は、最後まで捨てることができなかつたにちがいない。その意味では、木曾勢は、都人にとっては、最後まで異邦人だった。そこへ行くと鎌倉勢はもっと柔軟だし、妥協的でもある。しかも現実には都に居坐って、『平

家』の作者達とも接触しているし、つきあってみれば、それほど異質な人間ではない。少なくとも木曾に感じたような隔絶感はしだいに薄められつつある。そして記憶の中の木曾勢は、ますます異邦人的なものとしての印象を深めてゆく。そしてこのあたりに、巴のような女武者の話を生み出す素地があった、と私は思っている。

たしかなことはわからないが、木曾勢でも鎌倉勢でも、大挙攻め上って来るときは、その中に女をまじえていたことは考えられる。道中途でくっついて来た遊女、あるいは故郷から来た女たち。いずれも、この集団について来れば飯の食いはぐれはないという計算からついて来た連中だし、荒くれの男たちも、陣中の性のなぐさみものとして、こうした女の存在を必要としたに違いない。

これらの女群は、都人にとっては珍しい存在であり、これが木曾義仲に結びつけて語られたのが巴である。だから、木曾義仲が異邦人であったように、巴もまた、都人とはまるきり異質の勇猛な女武者として描かれたのではないかと思う。私は巴という人物が実在したかどうかについては疑問を持つが、そうした女群の存在はみとめるし、また巴が勇婦として描かれてゆく過程は理解できるような気がする。

ところで『平家』は巴が東国に逃れたということだけを書いて、その後の消息を語っていないために、いろいろ伝説が生まれた。有名なのは鎌倉勢にいけどられて鎌倉へ連れてゆかれ、和田義盛と再婚し、朝比奈三郎義秀と呼ばれる剛勇の武者を産んだという説である。

が、これは当時のもう一人の勇婦、板額の話とないまぜになって生まれた伝説だ。少し後になるが、越後の豪族の城氏が叛乱をおこし、鎌倉勢によって鎮圧されるという事件があった。このとき中心人物だった城資盛の叔母に板額という女性がいて、鎧を着て強弓をひき、鎌倉勢をさんざん悩ませた。この板額が生けどりになって鎌倉へ連れて来られたとき、御家人の一人、浅利与一義遠という者が、自分に預からせてくれと申し出た。その理由をたずねると、

「この女と結婚して、剛勇の子をもうけ、幕府のお役に立ちたい」

と答えた。これを聞いて「いかに何でも物ずきな」と人々は笑いころげた、と『吾妻鏡』は書いているが、どうやら、この話が巴の後日譚となってしまったらしいのだ。ちなみに彼女の結婚相手となったといわれる和田義盛は、鎌倉の侍所の別当だから、いわば陸軍大臣といった重要な地位をしめる人物。のちに実朝の時代になって叛乱を起こし、北条氏にほろぼされる。このとき、彼の子の朝比奈三郎は奮戦し、遂に誰にも捉えられずに行方をくらました。この朝比奈三郎は、以前から大力、剛のものという評判が高かったので巴に結びつけられたのであろう。

——以上、教材文Ⅰ——

読解上のポイントについては、「総括」において、教材文Ⅱとともに述べたい。

5 展開（2）—教材文Ⅱ（拙文「巴に求められたもの」）の読解

拙文もまた、先述の通り、源平盛衰記を前提とした論述である。

—————以下、教材文Ⅱ—————

巴に求められたもの—源平盛衰記の女武者像¹³⁾

源 健一郎

一 畠山重忠の役割

かつて栄華を誇った平家を都落ちに追い込んだ木曾義仲であったが、都での政治をつかさどる能力には欠け、従兄弟である源氏の棟梁、頼朝が差し向けた鎌倉勢に攻め立てられることになった。六条河原で敗れた義仲の一行は、東へ落ちようと三条河原にさしかかる。それを背後から呼び止めたのが、鎌倉勢の勇将、畠山重忠の率いる軍勢であった。多勢に無勢で苦戦する義仲方であったが、そこに美々しい装束に彩られた武者が現れる。

木曾方ヨリ、萌黄糸威ノ鎧ニ、射残シタリケル鷹羽征矢負テ、滋籐弓真中取、芦毛馬ノ太逞ニ、小キ巴摺タル鞍置テ乗タリケル武者、一陣ニ進テ戦ケルガ、射モ強切モ強、馳合々々責ケルニ、指モ名高畠山、河原ヘサト引テ出。(略)アレハ木曾ノ御乳母ニ、中三権頭ガ女、巴ト云女也。ツヨ弓ノ手ダリ荒馬乗ノ上手、乳母子ナガラ妾シテ、内ニハ童ヲ仕フ様ニモテナシ。軍ニハ一方ノ大將軍シテ、更ニ不覺ノ名ヲ不取。今井樋口ト兄弟ニシテ怖シキ者ニテ候ト申。(源平盛衰記卷三十五)

巴の登場である。源平盛衰記がその相手を、重忠に担わせていることは重要である。『平家物語』諸本のなかでも、盛衰記は、もっとも大部に増補され、その成立も時代が下るテキストである。盛衰記の段階では、重忠は随所で顕著に理想化されており、巴は、その重忠でさえも、いったんの退却を余儀なくされるほどの武者振りであったというのである。半沢六郎成清が語るところによると、巴は、義仲を木曾にて預かり、養育した「中三権頭」中原兼遠の娘であり、義仲の乳母子であったという。しかも「妾」すなわち愛人でもあり、普段は「童（わらわ）」のように仕え、いくさにおいては「一方ノ大將軍」として活躍したとされる。他の『平家物語』諸本には見られない設定である。特に、義仲の「妾」として位置付けられることには注意しておきたい。

一方、この後、盛衰記に登場する内田（後述）の言葉には「木曾殿ニハ、葵・巴トテ二人ノ女將軍アリ。葵ハ去年ノ春、砺並山ノ合戦ニ討レヌ」とあり、他の諸本が「山吹」とする巴の連れの名を「葵」とし、巴と並ぶ「女將軍」として紹介する。砺波山（俱利伽羅）の合戦で戦死したというが、盛衰記の該当場面に葵の名は見えない。女將軍「葵」の存在を設定することは在地伝承によるものではなく、ここで巴をどう描くか、という盛衰記の意図に関わるものであったのだろう。「いたはりあつて都にとゞま」った「山吹」（覚一本）は弱々しい女性である

がゆえに、巴の武者振りを否応なく引き立てるものであった。ならば、盛衰記における女将軍「葵」の登場は、『平家物語』諸本が〈木曾最期〉において巴に与えた特殊性、個別性を相対化するものといつてよいだろう。盛衰記が描く巴の女武者としてあり方は普遍化しうるものとなり、後世の男たちは、女たちに期待する理想の姿のひとつを、巴から抽出することとなるのである。

こうした巴の女武者の姿を際立たせる存在は、やはり重忠であった。いったん逃れた重忠は、女武者相手に不覚を取ることを恐れながらも、巴が義仲の「妾」であることに興味が引かれ、ふたたび巴と駆け合う。

進退キ、廻合ンクト廻ケレバ、木曾巴ヲ組セジト^{かけへだて}蒐阻々々テ、二廻三廻ガ程廻ケル処ニ、畠山、巴強チニ近ク廻合。是ハ得タル便宜ト思、馬ヲ早メテ馳寄テ、巴女ガ弓手ノ鎧ノ袖ニ取付タリ。巴叶ジトヤ思ケン、乗タル馬ハ春風トテ、信濃第一ノツヨ馬也。一鞭アテ、アヲリタレバ、冑ノ袖フツト引切テ、二段計ゾ延ニケル。畠山、是ハ女ニハ非ズ、鬼神ノ振舞ニコソ。

まず、重忠に対する義仲の動きに注目したい。巴に組ませまいと体を張って防ぐ姿である。〈妾〉である巴に対する義仲の愛情の現れであろう。盛衰記以外の諸本においても、巴を義仲の〈妾〉として捉えうる要素は備わっていた。しかしながら、それを〈妾〉という言葉で物語に刻印することは、巴の人物像が変容し、拡大してゆく過程において、盛衰記が踏み出した大きな一歩であった。というのも、中世から近世にかけて、中世物語やお伽草子、仮名草子といった文学作品、あるいは謡曲や幸若、浄瑠璃といった芸能に巴の姿は様々に現れ、その像の基盤には〈妾〉としての女性性があるからである。〈妾〉とは男と関係を結び、時にはその男と自らの資質を受けつぐ子を儲け、時にはその男の菩提を弔う存在である。そうした女性性を担う巴像は、盛衰記を除けば、『平家物語』の外側で広がり、多様に展開したものである。

また、ここでの重忠と巴のやり合いも興味深い。巴は重忠に掴まれた鎧の袖を引きちぎって、その場を逃れる。決して袖を手放さない重忠の握力の発揮には、盛衰記の諸処で強調される彼の大力伝承が前提にある。鶴越の坂落において愛馬を担いで降りた重忠の大力は、「鬼神ノ所為」（巻第三十七）と評されるほどのものであった。しかしここでは、その重忠をして「鬼神」と恐れさせるほどの凄まじさを示した巴の大力の方に焦点があるのである。このいわば「鎧ノ袖引」とも呼ぶべきやり合いから、悪七兵衛景清の^{しころ}鋏引（『平家物語』）、曾我五郎時致の草摺引（『曾我物語』）を想起することは容易であろう。周知の通り、「一引」と呼ばれる力比べは、中世から近世にかけての芸能における、もっとも華やかな場面のひとつである。盛衰記は、「鎧ノ袖引」を通じて、重忠を上回る巴の大力振りを鮮明に、一種の芸能的な趣向のもとに引き立てるのである。

そして、この後、盛衰記は、主従七騎に討ちなされた義仲の軍勢が栗津へと向かう道中、関寺の前にて、もう一度、巴の装束を描写する。しかし、三条河原では「萌黄糸威ノ鎧」とされていたものが、都から落ちる際に「紺村紅二千鳥ノ冑直垂」に着替え、関寺でふたたび「萌黄

糸威ノ腹巻」を着けたという具合になっていて、いかにも不自然である。鞍についても、三条河原での「小キ巴摺タル鞍」が、関寺では「金覆輪ノ鞍」とあるなど、巴のふたつの装束描写の間には矛盾がある。こうした齟齬を顧みず、ここでふたたび巴の装束を描くことの盛衰記の意図は、直後の次のような巴を描くことにあったのであろう。

七騎ガ先陣ニ進テ打ケルガ、何トカ思ケン、甲ヲ脱、長ニ余ル黒髪ヲ、後ヘサト打越テ、額ニ天冠ヲ当テ、白打出ノ笠ヲキテ、眉目モ形モ優也ケリ。

「長ニ余ル黒髪」が女性性の象徴であることは言うまでもない。「天冠」は舞楽の迦陵頻の天女や童舞の童、あるいは騎射の行事の童などが冠のかわりにつける美しい額あてであり、巴の芸能的性格を象徴する意匠となる。また、「白打出ノ笠」とは、白く織り出した綾蘭笠の謂い。綾蘭笠とは、蘭草を編んで浅い鞍のような形に作り、頂に髻を入れるための突起があるものである。義経が奥州に下るとき、北の方を男装させて伴ったと『義経記』は伝えるが、その男装の仕上げが「白打出の笠をぞ着せ奉る」であった。「白打出ノ笠」とはすなわち、巴の男性性の象徴ということになる。盛衰記の巴のイメージは、最後のいくさの場における巴の姿に凝縮された。重忠の存在によって引き出された巴の「妾」／女性性と、大力／男性性は、芸能的な装いを纏った女武者の異形の上に統合されたのである。

二 最後のいくさ

さて、次に巴と組み合うのは内田三郎家吉と名乗る武士であり、彼が巴の最後のいくさの相手となる。

内田は、かねてから巴のことを知っていた。巴について、頼朝から「アヒ構テ虜ニシテ進ベキ由」の命を受けていたのである。巴の武名は頼朝の耳に入っていたということになる。盛衰記には、義仲の討死後に関東に下された巴が、和田義盛に引き取られて朝比奈三郎義秀を儲けたことを伝える。巴の武名が関東にまで及んだとすることは、そうした巴の後日譚の伏線として作用していよう。

ならば、盛衰記の巴には、その武名に相応しい闘いぶりが求められることとなる。他の『平家物語』諸本では、巴の最後のいくさは、乱戦の中でのゲリラ戦的展開として描かれていた。巴の大力振りを単純に強調する趣向であるが、盛衰記における巴のいくさは様子が異なる。内田はまず、「女、雖強百人ガ力ニヨモ過ジ。家吉ハ六十人ガ力アリ。殿原三十余人、既百人ニアマレリ」と、いったんは巴の武力の優位を冷静に認め、集団に取り込んで討つことを考えている。結局は背後に控える一条次郎の目を憚って、一騎打ちに向かうのだが、盛衰記はこうした内田の心の揺れを描くことを通じて、いつしか関東武士の間に定着したであろう巴の武威のカリスマ性を伝えていると言えよう。

しかも、その後展開する巴の最後のいくさは、極めて様式的である。いくさは、巴と内田の名乗りから始まった。巴は内田を讃えて言う。

「天晴、武者ノ兒哉。（略）誰人ゾ。角問ハ、木曾殿ノ乳母子ニ、中三権頭兼遠ガ娘ニ巴ト云女也。（略）」ト云。「鎌倉殿ノ仰ヲ蒙、勢多ノ手ノ先陣ニ進ルハ、遠江国住人内田三郎家吉」ト名乗テ進ケリ。

次に描かれるのは、互いの武威を重んじ、間合いをはかりながら近づく二人。

巴ハ、一陣ニ進ハ剛者、大將軍ニ非ズ共、物具毛ノ面白キニ、押並テ組、シヤ首ネジ切テ軍神ニ祭ント思ケルコソ遅カリケレ、手綱カイタリ歩セ出ス。去共内田ガ弓ヲ引ザレバ、女モ矢ヲバ不射ケリ。互ニ情ヲ立タレバ、内田太刀ヲ拔ザレバ、女モ太刀ニ手ヲ懸ズ。主ハ急タリ、馬ハ早リタリ。巴、内田、馬ノ頭ヲ押並、鎧トク蹴合スルカトスル程ニ、寄合互ニ音ヲ揚、鎧ノ袖ヲ引違、「エタリヤヲウ」トゾ組タリケル。

馬を駆けつつ弓を射る馳組み戦の様相から、太刀による馬上打ち物の心づもりへ、そしてついに両者は組打ち戦に臨むこととなる。徐々に敵に肉薄していき、組打ち戦になれば、どちらかが首を取られる運命となる、すなわち、徐々に敵も自分も死に近づいていくのが、『平家物語』における合戦のあり方であると言われるが、その通りの展開である。

想起されるのは、『今昔物語集』巻二十五に伝わる源充と平良文との戦いであろう。東国で武勇を競っていた充と良文は、互いの部下が中傷しあったこともあって、次第に険悪な関係となっていた。ある日、雌雄を決しようと、各五、六百人の軍勢を催して、合戦の運びとなる。ところが開戦の「牒」を届ける軍使を交わした後、良文方からふたたび使いが遣わされる。充と良文の一騎打ちで決着をつけよう、というのである。充も即座に承諾する。ここで展開される合戦のあり方が、盛衰記の巴と内田のそれとよく似ているのである。

武芸の高さを確かめあった二人は戦いをやめ、互いを讃えて兵を引き、その後は親しく過ごしたという。まるでレベルの高いスポーツの一場面を髣髴とさせるような展開といえよう。当時は馳組み戦が主であるので、両者はともにすぐに弓を放ちつつ、互いの実力を見極めているのだが、源平合戦の頃には、先述したようにいくさの方法が多様化していて事情が異なる。手は出さずとも、弓から太刀、組み合わせへと間合いをはかり合う巴と内田もまた、充と良文と同じような緊張感の中で、お互いの力の程を確かめていたのであろう。

しかしながら、こうした一騎打ちのあり方は一般的なものではなかった。一騎打ちは馳組み戦としては特殊なもので、本文にも「昔の兵、此く有りける」とあるように、『今昔物語集』の時代（十二世紀前半）には既に失われた、理想的な戦いの仕様が伝えられたものであったのである。巴と内田の場合でも、一騎打ちの内容（馳組み・馬上打ち物・組打ち）については源平合戦当時の戦法を反映していると言えようが、あのような一騎打ち自体の設定とそこに描かれる両者の心構えは、多分に現実離れした理想的なものといっていよう。

ただし、巴と内田の一騎打ちの決着は、充と良文の場合とは大きく異なる。組み合う両者の大力が拮抗し、膠着状態が続くなか、思い切った手に打って出たのは内田であった。巴の黒髪を絡げ取り、馬上で腰刀を抜いて首を搔こうとしたのである。巴は、大将の振る舞いとも思え

ない、と憤然と非難する。

女ニ組程ノ男ガ、中ニテ刀ヲ抜、目ニ見スル様ヤハ有ベキ。軍ハ敵ニ依テ振舞ベシ。故実モ知ヌ内田哉。

巴の怒りの矛先は、内田がいくさの「故実」に反したことに向いている。内田の行動は、力の拮抗する男同士ならともかく、男よりも力の劣る女（巴は例外だが）を相手にしては、取ってはならない卑怯なものであったというのである。馬上での組み合いの最中に腰刀を抜いた内田の行動は、なぜそこまで非難されねばならなかったのであろうか。

いくさの「故実」として参照すべきは、『平家物語』諸本にも語られる、当時の武士が守るべき合戦の故実（ルール）である。その代表的なものは「真光故実」と呼ばれる。治承四年（一一八〇）の小壺坂合戦において、和田義盛が経験豊富な郎党三浦真光から馳組み戦の心構えを聞きだしたものである。

軍ハ尤故実ニ依ベシ。（略）昔ハ馬ヲ射事候ハズ。近年ハ敵ノ透間ナケレバ、マツ馬ノ太腹ヲ射テ主ヲ驛落シテ、立アガラントスル処ヲ、御物射ニモスル候。（略）敵手繁クヨスルナラバ、様アルマジ、押並テ組デ落、腰刀ニテ勝負ヲシ給へ、トゾ教タル。

盛衰記卷第二十一

組打ちは「近年」に増加した戦法であり、「敵手繁クヨスルナラバ」許容される方法であった。ただし、腰刀の使用は組み落としてからの落馬後、とされている。巴の言う「故実」とはこうしたものを指すのだが、巴と内田の戦いは一騎打ちであり、組み落として腰刀を用いてもよいとされる条件には当てはまらない。しかも、内田は落馬する前に馬上で腰刀を取り出しており、「故実」に対して二重に過ちを犯したことになる。巴の非難はそこに向けられたのであった。このような内田の過誤を的確に指摘した巴は、「故実」に通じた理想の武士ということになるのであろう。

内田が「故実」を逸脱したからには、両者のいくさは充と良文のように調和の中で平穩に終わる、というわけにはいかなかった。巴はたちまち内田を鞍の前輪に組み伏せ、内甲に手を差し入れるや、引きあおのけて腰刀でその首を搔き切る。真光が説く「故実」には反するこのような馬上での腰刀による組打ちも、実際にはしばしば行われていた。巴は「故実」を無視した相手に対して、冷静で現実的な対処でもって仕留めてみせたのである。このことは、巴が「故実」に則ろうとも、そうでなくとも対処しうる高い戦闘能力を持つことを表すものでもある。

三 義仲との別れ

巴に内田の首を見せられた義仲の反応は、意外なものであった。「是（内田）モ運尽ヌレバ汝（巴）ニ討レヌ。義仲モ運尽タレバ、何者ノ手ニ懸、アヘナク犬死センズラン」という弱気

を見せたのである。人間存在の無常を觀じたといってもよい。続いて義仲の口を突いて出るのが、「日来ハ何共思ハヌ薄金（源氏重代の鎧）ガ肩ニ引テ思也」であった。『平家物語』諸本において、乳母子兼平に義仲が語った言として有名なものであるが、盛衰記の義仲は同じ思いを巴にも打ち明ける。そして、次に「最後ニ女ニ先陣懸サセタリトイハン事コソ恥シケレ」と、他の『平家物語』諸本にも共通する戦場の倫理を持ち出して、巴に戦場離脱を命じるのである。

ただし、盛衰記では、なおも命に従わず抗う巴に義仲は、信濃に残した妻子のことを語り出す。「無ラン跡マデモ此事ヲ知セテ、後ノ世ヲ弔ハバヤト思ヘバ、最後ノ伴ヨリモ可然ト存ル也、疾々忍落テ信濃ヘ下、此有様ヲ人々ニ語レ」と義仲。巴は涙ながらにこれに従い、ひとまず「上ノ山」に身を隠す。義仲が討たれるのを見届けた巴は、「物具脱捨、小袖装束シテ」信濃へ下り、最期の様を語り伝えたという。

盛衰記の巴には、義仲の最期を見届けて人々に語り、ともに後世を弔うという任務が負わされることになった。謡曲（能の台本）「巴」でも、盛衰記の巴と似通った造型がなされている。その前半では、巴の亡霊の化身である巫女が旅僧の前に現れ、義仲の跡を弔うように勧める。後半では、武装姿の巴が義仲の最期を語り、義仲の死後、鎧を脱ぎ捨て、形見の小袖をまもって木曾へと落ちてゆく。義仲の最期を見届け、女性芸能者の装束でもあった小袖姿で立ち去る巴の姿に、女武者巴を騙る芸能者による義仲鎮魂の語りの世界を想定する指摘もある。

また、義仲に自害を勧め、自らが戦うことで自害を遂げさせ、その最期を語るために戦場を離脱する、という謡曲「巴」の筋書きは、執心の中にある巴が弔いの対象であると同時に、巴こそが義仲に対する鎮魂の主体であることを示している。『平家物語』の筋書きに対する大きな改変は、巴を鎮魂の主体とすることに由来するのであろう。ならば、後世を弔うことを義務づけられた盛衰記の巴もまた、自らが鎮魂の主体であることを、物語の中で明確にされねばならない。ただし、盛衰記が選んだ方法は、筋書きからの逸脱ではなかった。巴を〈妾〉として設定し、諸処で際立てられる巴の女性性を通じて、巴を鎮魂の主体、すなわち〈弔う女〉に相応しい存在として位置づけたのである。

先述したように、盛衰記は巴の後日譚として、和田義盛の妻となり、その子、朝比奈三郎義秀を産み、和田合戦で一族が減んだ後、越中に落ち延びたと語る。

義盛、相具シテ候共、僻事更ニ在マジキト、様々申立テ、預ニケリ。即、妻ト憑テ、男子ヲ生。朝比奈三郎義秀トハ是ナリケリ。母ガ力ヲ継タリケルニヤ、剛モ力モ並ナシトゾ聞エケル。和田合戦ノ時、朝比奈討レテ後、巴ハ泣々越中ニ越、石黒ハ親シカリケレバ、此ニシテ出家シテ、巴めでたくニトテ、佛ニ奉花香、主・親・朝比奈ガ後世弔ヒケルガ、九十一マデ持テ、臨終目出シテ終リニケルトゾ。

ここで言われる「主」には、和田とともに義仲が含まれたはずである。そして、巴の最期は「臨終目出めでたく」であった。〈弔う女〉の往生譚に、弔われるべき者の鎮魂が託されていることは、『平家物語』の結びの巻である灌頂巻の例を持ち出すまでもないだろう。〈妾〉としての巴に託された〈弔う女〉としての像を、盛衰記はこうして完結させるのである。

しかし、〈妾〉としての巴に対する期待は、〈弔う女〉だけではなかった。巴に求められたもうひとつの像は、母性、すなわち〈産む女〉としての像であり、それは盛衰記の諸処に強調される大力、武者振りといった巴の男性性と表裏の関係にある。巴と和田の間に生まれた子、朝比奈は、「母ガ力」を引き継いで、「剛モ力並ナシ」であった。超人化した朝比奈伝承が、中世から近世に広く行われたことはよく知られていよう。義仲の〈妾〉として発揮された巴の武力は、和田の〈妾〉となり、朝比奈の母となることで次代に継承された。武士の家において秀でた存在が誕生し、家を発展させるには、それに相応しい母、〈産む女〉が必要とされたが、盛衰記の巴は、その理想像として形象されているのである。

いくさの「故実」に通じた大力という男性性を兼ねそなえ、かつ産み、かつ弔う。武士の家の男たちがこうした理想的な女性を求めることは、現実的かつ切実な欲求であっただろう。盛衰記は『平家物語』諸本に伝えられる巴の上に、その像を整えたのである。『平家物語』の巴については、職業的戦士としての武士の家の成立を背景として形成されたものという指摘がある。盛衰記の編者は、中世という時代の武士の家からの要請に応じて、他の『平家物語』諸本に伝えられる巴像に大きな改変を施したといえるだろう。

——以上、教材文Ⅱ——

読解上のポイントについては、次の「総括」において、教材文Ⅰとともに述べたい。

6 総括—巴像の相違への気づき

永井路子「巴」（教材文Ⅰ）における巴理解のポイントのひとつは、『平家物語』の他の女性像に対して異質であるとする点である。「なよなよ」とした他の女性に対して「男まさり」な巴像は、「王朝風な美意識にひきずられながらも別の世界を生み出して」いく『平家物語』が、新しい時代における女性像の象徴として描いたものと評するのである。永井による直接の言及はないが、北条政子や日野富子のような存在を見通しているのかもしれない。もうひとつは、都人にとっての「異邦人」であった木曾勢の中でも、遊女性を帯びるが故に、さらに特異なものと認識された点である。永井はここに、むしろ唯一の女武者として描かれる原点があったと見ている。その巴が、一説には関東で勇猛な武士の母となったとされることを紹介して文章が閉じられるのだが、都における異邦人は、やはり辺境である関東においてのみ受け入れられる存在であることを示唆したものであろうか。そう考えれば、永井による巴理解は、その孤立性、異質性に一貫して焦点が合わせられていると見ることができよう。

一方、盛衰記における巴を考察した拙文（教材文Ⅱ）では、さらに極端なまでに強調される巴の武力に、その男性性を、一方で、義仲との愛人関係が規定された上で語られる巴の美しさに、その女性性を見出している。相矛盾する属性を有した両義的存在であるわけだが、そうし

た像が違和感なく受け入れられるための仕掛けが、巴の上の表出される芸能性であった。芸能という超現実的な意匠が与えられる所以である。ただし、盛衰記では、こうした巴の多面的な特殊性も、結局は、武家の継承者を産み、戦乱の中で死にゆく男たちを弔う、武家社会における女性に期待された役割をじゅうぶんに果たしうる理想的存在、という地点に封じ込められてしまう。そういう意味では、盛衰記の巴は、永井が覚一本に見出したような孤立性は有していない。あくまで、武家における家族制度の中に組み込まれる存在なのである。

なお、教材文Ⅱでは、引用した本文に現代語訳を付していない。生徒たちの理解度にもよろうが、古典本文の意味がじゅうぶんに理解されなくても、前後の現代文表現から内容が類推されることを期待して載せなかったものである。ただし、盛衰記には現代語訳が出版されているので、必要に応じて利用してもよいだろう¹⁴⁾。

また、教材文読解の前提となる日本史的な知識は、生徒間の個々の水準に相当な差異がある。『学習指導要領』に強調される言語活動（「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」）を活かす意味でも、授業時間中にグループ活動を取り入れ、生徒がお互いに知識を補完し合うような環境で学習を進めることも考えてよいであろう。知識的側面のみならず、巴の人物像に対する意見を伝え合い、議論し、認識を深め合うような授業形態を取ることができれば、個人レベルの読解に留まる段階よりも、さらに有意義であるとも言えよう。

以上、教材文Ⅰ・Ⅱを読み比べることで、『平家物語』諸本における人物形象の違いについて、生徒たちは関心を持つことになるであろう。しかしながら、今回の授業案においては、あくまで、永井によるエッセイと拙文という「ガイド」に導かれての理解に止まっている。可能であれば、覚一本・盛衰記の古典本文に改めて接する機会のあることが望ましい。覚一本では、永井によって引用された古典本文が、義仲と兼平との乳兄弟の物語の中に差し挟まれていることがわかるであろう。巴に関する部分だけを抜き出して読む場合と、前後の文脈を踏まえて読むのでは、自ずと読解も変わってくるだろう。盛衰記の本文についても、本来はきわめて長文であり、拙文における引用は、やはりそのごく一部に過ぎない。そこまで求めるならば、もはや「古典B」における要求水準と何ら変わることがなくなってしまうのだが、本授業案の展開例として示しておきたい¹⁵⁾。

おわりに

『平家物語』における人物像として、諸本における相違を考えることのできる対象は、他にも様々に見出すことができよう。しかしながら、巴以外の女性像については、小宰相のみ若干様子が異なるが、総じて典型的であると言わざるを得ない。そういう意味においても、巴を扱うことの意味は大きい。

本授業案においては扱いきれなかったが、巴の女性像は、中世後期の芸能や近世における仮名草子・浄瑠璃等において、さらに多様な変容を被ってゆく。特に川柳や狂歌においては、性的対象として貶められるようなイメージも強まってゆく。これらの本文については、注釈や現代語訳が公刊されていないものが多く、高校生には荷が重かるうが、「古典好き」の生徒には、夏期休暇等の自由研究課題として、ぜひ探究を勧めたいものでもある。

「類型的」と述べたばかりではあるが、一方で、『平家物語』における女性像については、一般向けの書籍において様々に取り上げられている。先述した細川涼一著書もその一つであったのだが、他にも大塚ひかり『男は美人の嘘がすき—ひかりと影の平家物語』や、宮尾登美子『平家物語の女たち』などが挙げられよう¹⁶⁾。これらの書籍を課題図書として、生徒たちに自主研究課題として取り組ませてみることも、有意義な試みであると考えられる。

註

- 1) 齋藤孝『声に出して読みたい日本語』（二〇〇一年、草思社）
- 2) 『高等学校学習指導要領』（文部科学省 二〇〇九一三）
- 3) 『高等学校学習指導要領解説国語編』（文部科学省 二〇一〇一六）
- 4) 水原一「義仲説話の形成」「巴の伝説・説話」（『平家物語の形成』一九七一 加藤中道館）
- 5) 高木信氏「戦場を踊りぬける—〈鎮魂〉する巴—」（『日本文学』四三—一八 一九九四—一八）
- 6) 細川涼一「巴—大力の女性の伝説」（『平家物語の女たち—大力・尼・白拍子』一九九八 講談社学術文庫）
- 7) 拙稿「巴に求められたもの—源平盛衰記の女武者像—」（『国文学 解釈と鑑賞』七〇—一三 二〇〇五—一三）
- 8) 拙稿「巴の変貌—大力伝承の共鳴—」（『日本文藝研究』五六—一四 二〇〇五—一三）
- 9) 高木信氏「〈戦場〉を踊りぬける—巴と義仲、〈鎮魂〉を選びとる」（『平家物語—装置としての古典』春風社 二〇〇八）
- 10) 須藤敬氏「『頸ねぢきッて』という表現をめぐる—源為朝・巴・畠山重忠—」（『三田國文』四七 二〇〇八—一六）
- 11) 須藤敬氏「学校現場で一次世代の平家物語」（『国文学 解釈と教材の研究』四七—一一二 二〇〇二—一一二）、同氏「〈戦い〉の描写における伝統的な言語文化—『大造じいさんと雁』から『平家物語』「敦盛最期」「木曾最期」へ—」（『三田國文』五二 二〇一〇—一一二）、同氏「『平家物語』の戦闘場面を教室で読むこと—フィクション化における描写を支えるもの—」（『三田國文』五四 二〇一〇—一一二）
- 12) 永井路子『平家物語の女性たち』（二〇一一年（初版一九七九）文春文庫（新装版））による。本文中、義仲の来歴等に纏わる叙述は割愛し、*の低書部には、内容を補う解説文を稿者が挿入した。
- 13) 前掲注（7）拙稿をもとにした。後注を省略し、『平家物語』諸本の詳細を扱うことを避けたり、適宜、注釈的な説明を付加したりして、教材文として用いられ得るよう改訂を施した。元原稿における主な参考文献は、以下の通り。

栃木孝惟氏「『木曾最期』を読む」（『軍記と武士の世界』二〇〇一 吉川弘文館 初出一九六七）

水原一氏「義仲説話の形成」（『巴の伝説・説話』『平家物語の形成』一九七一 加藤中道館）

高木信氏「戦場を踊りぬける—〈鎮魂〉する巴—」（『日本文学』四三—一八 一九九四—一八）

川合康氏『源平合戦の虚像を剥ぐ—治承・寿永内乱史研究』（一九九六 講談社選書メチエ）、

近藤好和氏「治承・寿永期の弓箭と刀剣」（『弓矢と刀剣—中世合戦の実像』一九九七 吉川弘文館）

細川涼一氏「巴—大力の女性の伝説」（『平家物語の女たち—大力・尼・白拍子』一九九八 講談社学術文庫）

拙稿「仮名本曾我物語と関東 I—畠山重忠像の在地性をめぐって—」国文学解釈と鑑賞別冊『曾我物語の作品宇宙』二〇〇三—一一

佐伯真一氏『戦場の精神史 武士道という幻影』（二〇〇四 NHKブックス）

拙稿「巴の変貌—大力伝承の共鳴—」（『日本文藝研究』五六—一四 二〇〇五—一三）

- 14) 現代語で読む歴史文学『完訳 源平盛衰記』勉誠出版
- 15) 覚一本『平家物語』の本文としては、新編日本古典文学全集（小学館）が注釈・現代語訳付きで、生徒たちにも扱いやすいだろう。源平盛衰記は、中世の文学（三弥井書店）のシリーズ（公刊途中）が注釈豊富だが、現代語訳は付かない。前掲注（14）著書を併用する必要があるだろう。
- 16) 大塚ひかり『男は美人の嘘がすきーひかりと影の平家物語』（一九九九 清流出版）、宮尾登美子『平家物語の女たち』（二〇〇四 朝日新聞社）

